中 山 大 学

2019年攻读硕士学位研究生入学考试试题

科目代码：641

科目名称：基础日语

考试时间：2018年12月23日上午

考生须知

全部答案一律写在答题纸上，答在试题纸上的不计分！答题要写清题号，不必抄题。

一、下線部の漢字に振り仮名をつけなさい。（1点×10＝10点）

(1) 生粋な江戸っ子。
(2) 日向ぼっこをする子供たち。
(3) どの説が正しいかを証明する術はない。
(4) 境内での喫煙はご遠慮ください。
(5) 商家に嫁ぐ。
(6) 封筒には、中山区役所御中と書いてある。
(7) 非難の声が巷に満ちている。
(8) ちょっと席を離れた隙に泥棒に入られた。
(9) そろそろ本音を吐いたらどう。
(10) 出家して自分の犯した罪を償う。

二、下線部の片仮名を漢字に改めなさい。（1点×10＝10点）

(1) あいつはミガッテな男だ。
(2) あの人は確か山田ナニガシとか言いましたね。
(3) ぜんそくのジビョウがある。
(4) 文化は、それが創り出された時代においてキョウジュされるに止まるものではない。
(5) そうは、トンヤはおろしてくれないだろう。
(6) しゃべるのはどうもフエテです。
(7) この光景の流れは、走馬燈と本性同じで、実はマボロシなのである。
(8) この高度情報化社会の到来に大きくキヨしたのはJIS漢字である。
(9) 県内クッシの起業家。
(10) 橋の一番ロウキュウした部分が壊れ始めている。

三、次の慣用句の意味について日本語で説明しなさい。（2点×10＝20点）

(1) 棚からぼた餅
(2) 火のない所に煙は立たぬ
(3) お茶を濁す
(4) 怪我の功名
(5) 骨抜きにする
(6) 胡坐をかく
(7) 因果を含める
(8) 渡りに船
(9) 寝耳に水
(10) 拍車をかける

四、次の文章は、日本の「近代」社会と「近代」以降の「ポスト近代」社会を動かした要因（駆動因）を分析した上で、新たな社会としての「ロスト近代」社会について論じている。これを読んで、後の問いに答えよ。（4点×4＝16点）

現代の社会、あるいはここで「ロスト近代」と呼ぶ時代は、九〇年代の中頃から出現してきた時代の新たなモードである。 バブル経済が崩壊して以降、日本の経済社会は「失われた一〇年」とか「失われた二〇年」などと言われている。もはや高度経済成長を望むことができず、停滞したシステムのなかで、経済のミニ・バブルの波に翻弄されているというのが、私たちの社会の実情であるだろう。日本経済はこれから、どんな政策によって再生することができるのか。さまざまな議論が噴出するなかで、経済の低迷がつづいている。

もはや欲望消費の増大によっては、大きな経済成長は望めそうにない。かといって、人々が勤勉に働けば経済が成長するのかというと、そうでもなさそうである。現代の資本主義社会は、「近代」の駆動因によっても、A「ポスト近代」の駆動因によっても、いずれによってもうまく発展しそうにない。私たちの社会は、新たに別の駆動因をもたなければ、大きな発展を見込むことができないようにみえる。

「ロスト近代」とは、さしあたって「近代」と「ポスト近代」を駆り立てていたそれぞれの要因が、いずれもその役目を果たし終えた（あるいは相対的に重要度を失った）時代であるだろう。むろん正確に言えば、近代の駆動因である物象化も、ポスト近代の駆動因である欲望消費も、いずれも存在している。その意味で、私たちの時代は重層的な原理で動いている。けれどもこれら の要素は、時代を動かすための動因としては、いずれもあまり見込みがない。そのような「失速感」こそが、私たちの時代を規定しているのではないだろうか。

とりわけ一九九〇年代中盤以降の現実として、「護送船団方式」と呼ばれる官主導の社会運営が機能しなくなってきた。社会があまりにも複雑になり、官主導の経済政策は、思ったほどの成果をあげることができなくなってきた。そこで政府は、さまざまな規制緩和政策を打ち出して、いわゆる「勝ち組」と呼ばれる新たな富裕層に、経済成長の牽引力を期待するようになった。ときはちょうど、グローバリゼーションが話題となった時代とも重なり、「勝ち組／負け組」という格差が問題化した時期でもあった。

ところが自由競争のもとで、日本社会は思わぬ事態に陥った。負け組と呼ばれる低所得層の人びとは、もはやいっしょうけんめいに働いても、「努力が報われない」と感じるようになる。人びとは、「ワンランク上」を目指して努力するよりも、欲求水準そのものをクール・ダウンするようになっていく。「勤勉」に働くことが報われず、「欲望」消費の快楽を期待できないような社会になる。するともはや、富裕層による消費の拡大は、経済全体を牽引することができなくなる。自分よりもワンランク上 の「勝ち組」の欲望を模倣（エミュレーション）するためには、一定の所得が必要である。ところがそのような所得が見込めないところでは、人びとはさしあたって、B各私化された欲望を抱くようになる。欲望のエネルギーは、「勝ち組の欲望を真似する」のではなく、「自分がしたいことをする」という水準にまで、収縮してしまう。けれどもいったい「自分がしたいこと」とは、何であろうか。セレブな生活に羨望を抱かず、「自分がしたいこと」をして満足できるためには、まず自分を好きになる必要がある。「自己への愛」でもって満足する必要がある。だが自分とは、何なのか。それが分からなければ、「自分探し」の旅に出なければならない。けれども旅に出るだけの余裕がなければ、人々はさしあたって、ネット上に「自己の快楽」を求める主体へと向かうのではないだろうか。

実際、人びとは、ネットを通じた情報消費によって、蛸壺化した選好を抱くようになっていった。インターネットやスマートホンなどに、一か月の定額基本通信料を支払ってしまえば、私たちは自身の欲望を、さらなる資本の論理と結びつける必要がない。基本料金を支払ってしまえば、あとは無料でさまざまなコンテンツを楽しむことができる。動画、音楽、ラジオ、ゲーム、等々、私たちは無料の情報をキョウジュするだけで、人生を楽しむようになってきた。欲望を肥大化させて「勝ち組」のライフ・スタイルを手に入れなくても、自己愛消費によって生活する術を学べば、人生を楽しむことができるようになってきた。

他方では、近代的な勤勉精神の喪失（ロスト）、および、ポスト近代的な欲望の喪失（ロスト）、というこのC二つの「ロスト」は、それぞれの時代における「対抗運動」の意義も失効させてしまった。「近代」においては、物象化や疎外に対抗するコミューン運動が、抵抗のライフ・スタイ

ルを導いてきた。また「ポスト近代」においては、逸脱的な欲望の表現が、抵抗の政治表現を提供してきた。ところが「ロスト近代」になると、こうした抵抗の戦略は、もはや時代に対抗するための象徴的意義を失っていく。これまでのような抵抗の表現は、時代の支配的な駆動因に対抗する機能を発揮できないためである。「ロスト近代」の社会においては、その支配的なモードに抵抗する活動は、時代の本質的な駆動因に迫るものでなければならない。ではそれは、いったい何であろうか。それを見定めるためにも、私たちはこの時代の駆動因を分析しなければならない。

そこでまず、「ロスト近代」の背景をなす諸条件について考えてみたい。ロスト近代は、人びとがしだいに、欲望消費のバカバカしさに気づきはじめたところから生まれている。宣伝に踊らされ、欲望をかきたてられ、欲しいと思ったブランド商品を買っても飽き足らない。そんな生活のむなしさ、あるいは欲望の飽き足らなさから逃れたいと感じ始めた人々は、しだいに欲望消費に巻き込まれず、自然で本来的な経験を求めるようになってきた。例えば、中高年層の登山ブーム、若者たちの古着志向、ロハスと呼ばれる自然なライフ・スタイルの探究、ユニクロや無印良品で楽しむシンプル・ライフ、もはや自動車に関心を向けず、ランニング・シューズや自転車を購入する若年層、フェアトレードへの関心、職場や学校に自前のお弁当を持参する草食系男子の出現、等々。こうした新しい生活の現象を、一つの言葉でくくることは難しい。だがそこには、共通する一つの志向、すなわち、「自然の本来的価値」への志向があるといえないだろうか。

私は以前、拙著『自由に生きるとはどのようなことか』のなかで、「創造階級（クリエイティブ・クラス）」と呼ばれる新しい支配階級の台頭について論じたことがある。創造階級とは、情報産業の新たな担い手たちである。彼・彼女らは、自分の欲望を満たすよりも、自分の潜在能力をできるかぎり引き出すことに、関心を示している。創造階級の人びとは、欲望消費には踊らされない。むしろ、クリエイティブな作品や商品を生み出すために、発想の源泉として、豊かな体験をすること、あるいは創造 的な環境に身を置くことに、大きな関心を寄せている。創造階級の人びとが求めているのは、創造の源泉である。その源泉を手に入れるために、自然の本来的な価値に触れたり、自然の多産性を身につけたりすることに、関心をもっている。

創造階級は、必ずしも高所得をかせぐことに成功した人たちではない。経済的に成功しなくても、クリエイティブに生きることには、十分な意義があるとみなされる。たとえば私たちは、できることなら環境にやさしい生活をしたいと思うことがある。賢く消費して、自然と融和したい。そのようなエコロジーへの関心は、高い給料を稼ぐ生活よりも、むしろ想像力（イマジネーション）を豊かに発揮して、自然と調和するような生活を求めるだろう。エコロジーへの関心は、真に創造的な生活と、さまざまな点で一致する。いずれも、イマジネーションを活用してはじめて実現できるような生活なのである。

では、真にエコロジカルな生活とは、どんなものであろうか。それはたんに、リサイクルをしたり、有機野菜を食べたりするというのではなく、もっと自然の神秘に迫るような、脱日常的な経験を必要としているのではないだろうか。自然の神秘をつかみ取るためには、日常生活においては隠されている「自然の多産な真理」に触れなければならない。多産な自然の神秘をつかみとったときに、私たちはエコロジーの担い手として、精神的にも豊かに生活していくことができるのではないか。

自然の多産性を、自分の生き方の原理とする。そのような生き方は、創造階級だけでなく、「真の豊かさとは何か」について関心をもつすべての人々に、魅力的な理想を提供している。私たちの社会は、エコロジカルな融和のために、クリエイティブな仕方で環境と向き合うことを、一つの理想としている。Dそのような営みへの関心は、資本主義の原理を、新たに動かす駆動因となりうるのではないだろうか。

（橋本努『ロスト近代資本主義の新たな駆動因』による）

(1) 下線部A「『ポスト近代』」とあるが、本文中の「ポスト近代」の説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。

a. 停滞した経済システムの中でも勤労精神を失わなかった人びとに突発的に訪れた小規模な好景気が、経済全体を牽引した時代。

b. 勤勉に働くことが日本経済のめざましい成長につながると信じた人びとによる勤労所得の著しい増大が、経済全体を牽引した時代。

c. 複雑化した社会に対する国家主導の経済政策が十全に機能しなくなり、代わりに市場に任せ

る規制緩和政策の効果 が、経済全体を牽引した時代。

d. 産業構造の変化と発展に伴い、広告などの情報に操られた人びとによる快楽に満ちた旺盛な消費欲の肥大が、経済全体を牽引した時代。

e. 人びとの中産階級意識は薄れつつも、「勝ち組」と呼ばれる一部の富裕層の消費行動を模倣した個人消費が、経済全体を牽引した時代。

(2) 下線部B「各私化された欲望を抱くようになる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。

a. グローバリゼーションの急速な拡大から、個人が目前の社会や他者との関わりを放棄して、潜在的な欲望を充足させる情報の消費によって人生を楽しむ術を身につけはじめるようになること。

b. 経済成長の停滞の下で、労働による生活の上昇にも消費の欲望にも幻滅を覚え、自分が本来したいことは何かという水準にまで欲望のエネルギーを縮小させ、自己の探究へと向かうようになること。

c. 日本経済の低迷に伴って、自分のできることは何かという先行きへの不安が広がり、競争原理に巻き込まれまいとし て自分探しに力を入れ、結局自己中心的な消費にはまり込むようになること。

d. 欲望に流されがちな個人のあり方への反省から、自分の創造的な力を引き出し、日常において隠されていた自然につながる生活を追い求め、多種多様な行動に自由にいそしむようになること。

e. 情報技術が高度に進化して個々人がネットに接続できるようになり、現実ではなくメディアが提供する無料コンテンツの中に快楽を求めて、自己の欲望を満たしはじめるようになること。

(3) 下線部C「二つの『ロスト』」とあるが、次に示されているのは、この文章を読んだ五人の生徒が「ロスト」の内容について話 し合っている場面である。本文の趣旨に最も近い発言を次のa～eのうちから一つ選べ。

a. 生徒A：こつこつと真面目に働いても所得が変わらないために、勤勉に働けば自分が幸せになれるということを信じられなくなってきた。それに、自分よりワンランク上の人たちを真似したいという欲望もなくなってきている。そういう人が目立ってきたことがこの文章の「二つの『ロスト』」ってことなんだよね。

b. 生徒B：勤勉の方はそのとおりだと思うけど、欲望の方は、物象化に抵抗して人間性を保ちつづけたいという欲望のことなんじゃないかな。そういう欲望が薄れてきていることと、勤勉に働くことを重要だと思わなくなってきたこ ととを併せて「二つの『ロスト』」っていっているんじゃないの。

c. 生徒C：いや、段落で官主導の経済政策が成果をあげられなくなったことに触れているでしょ、だから、政 府のために努力しても仕方がないし、昇進して高い地位を得たいとも思わなくなってきた。そういう人が多くなって、 経済の低迷がつづいていることを、ここで「二つの『ロスト』」と呼んでいるんじゃないかな。

d. 生徒D：そうかなぁ。むしろ規制緩和政策の中で勤勉な富裕層に経済を牽引することを期待したけど効果が出ないし、人びとの欲望を刺激しても消費が伸びていかない。そういうふうに、政策的にも経済的にも見込みがなくなっていることが「二つの『ロスト』」だと思うよ。

e. 生徒E：たしかに、欲望のままに消費するのはバカバカしいし、それに、勤勉に働いても報われない。そんなふうに考える人が多くなっているので、欲望と勤勉さのどっちも経済を成長させる重要な要因でなくなった。そんな状況 をここでは「二つの『ロスト』」と表現しているんだと思うな。

(4) 下線部D「そのような営みへの関心は、資本主義の原理を、新たに動かす駆動因となりうるのではないだろうか。」とあるが、どうしてそのように考えられるのか。その理由として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。

a. 「ロスト近代」の人びとは、際限のない消費を捨て自然との融和を志向する創造階級として社会で台頭したいという階 層意識をもっている。エコロジーに関心を持つそのような大衆の出現は、新たな消費活動を生むとともに生産の拡大をもたらし、この時代の経済を動かしていく要因になるから。

b. 「ロスト近代」の人びとは、クリエイティブな仕方で環境と向き合うことを自分の生き方の原理にし、経済的に成功して高所得をかせぐことを拒否して自然と調和した生活環境を求める中で、これまでと異なる新たな消費を生みつつある。その動きがこの時代の経済を動かしていく要因になるから。

c. 「ロスト近代」の人びとは、宣伝に踊らされるのではなく自身の可能性を高めるための本来的な経験を求め、日常の中でイマジネーションを活用して自然と調和することに価値を置く傾向がある。その価値観に基づく新たな消費活動の広がりが、これからの経済を動かしていく要因になるから。

d. 「ロスト近代」の人びとは、真にエコロジカルな生活とはリサイクルをしたり有機野菜を食べたりすることだと考えており、そのような自然との融和によって精神的に豊かな生活を送る機会を増やしつつある。その流行が新たな消費を生 み、これからの経済を動かしていく要因になるから。

e. 「ロスト近代」の人びとは、情報産業の担い手としてクリエイティブに生きることに意義を見いだす創造階級にあこがれ、自分も同じような生き方をすることを目指している。その強いあこがれは、新たな欲望と消費を生むきっかけとなり、この時代の経済を動かしていく要因になるから。

五、次の文章を読み、後ろの問いに答えよ。(計 14 点)

住む所に多少の草木があったのは、郊外の農村だったからである。もちろん畑たんぼの作物があり、用水堀ぞいに雑木の藪もあり、植木屋の植溜もいくつかあったし、またどこの家にもたいがい、なにがしか青いものが植えてあった。子供たちはひとりで、木や草に親しんでいた。

そういう土地柄のうえに、私のうちではもう少しよけいに自然と親しむように、A親が世話をやいた。私は三人きょうだいだが、めいめいに木が与えられていた。不公平がないように、同じ種類の木を一本ずつ、これは誰のときめて植えてあった。だから蜜柑も三本、柿も三本、桜も椿も三本ずつあって、持主がきまっていた。持主は花も実も自由にしていいのだが、その代り害虫を注意すること、施肥をしてもらうとき、植木屋さんに礼をいっておじぎをすること等々を、いいつかつていた。敷地にゆとりがあったから、こんなこともできたのだろうが、花の木実の木と、子供の好くように配慮して、関心をもたせるようにしたのだとおもう。

父はまた、木の葉のあてっこをさせた。木の葉をとってきて、あてさせるのである。その葉がどの木のものか、はっきりおぼえさせるためだろう。姉はそれが得意だった。枯れ葉になって干からびていても、虫が巣にして筒のように巻きあげているのも、羽状複葉の一枚をとってきたのでも、難なく当ててしまう。まだ葉にひらいていない、かがまった芽でさえ、ぴたりとあてた。私もいくつかは当てることができるのだが、干からびたのなどだされると、つかえてしまう。そこを横から姉が、さっと答えて、父をよろこばす。私はいい気持ではなかった。姉のその高慢ちきがにくらしく、口惜しかった。しかし、どうやっても私はかなわなかった。そんなにくやしがるなら、自分もしっかり覚えればいいものを、そこが性格だろうか、どこか締りがゆるいとみえて、不確かにずっこけた。ここが出来のいい子と出来のわるい子との、別れ道だった。

出来のいい姉を、父は文句なくよろこんで、次々にもっと教えようとした。姉にはそれが理解できるらしかつたが、私はそうはいかなかった。姉はいつも父と連立ち、妹はいつも置去りにされ、でも仕方がないから、うしろから一人でついていく。B嫉妬の淋しさがあった。一方はうまれつき聡いという恵まれた素質をもつ上に、教える人を喜ばせ、自分もたのしく和気あいあいのうちに進歩する。一方は鈍いという負目をもつ上に、教える人をなげかせ、自分も楽しまず、ねたましさを味う。まことに仕方のない成りゆきである。環境も親のコーチも、草木へ縁をもつ切掛けではあるが、姉への嫉妬がその切掛けをより強くしているのだから、すくなからず気がさす。

しかし、姉は早世した。のちに父は追憶して、あれには植物学をさせてやるつもりだったのに、としばしば残念がってこぼしていたところをみると、やはり相当の期待をもっていたことがわか

るし、その子に死なれてしまって気の毒である。

出来が悪くても子は子である。姉がいなくなったあとも、父は私にも妹にも、花の話木の話をしてくれた。教材は目の前にたくさんある。大根の花は白く咲くが、何日かたつうちに花びらの先はうす紫だの、うす紅だのに色がさす。みかんの花は匂いがいいばかりではない、花を裂いて、花底をなめてみれば、どんなにかぐわしい蜜を貯えていることか。あんずの花と桃の花はどこがちがうか。いぬえんじゅ、猫やなぎ、ねずみもち、なぜそんなこというのか知ってるか。蓮の花は咲くとき音がするといわれているが、嘘かほんとか、試してみる気はないか－－そんなことをいわれると、私は夢中になって早起きをした。私のきいた限りでは、花はボンなんていわなかった。だが、音はした。こすれるような、ずれるような、かすかな音をきいた。あの花びらには、ややこわい縦の筋が立っていて、ごそっぽい触感がある。開くときそれがきしんで、ざらつくのだろうか。

C<u>こういう指示は私には大へんおもしろかった</u>。うす紫に色をさした大根の花には、畑の隅のしいんとしたうら淋しさがあり、虻のむらがる蜜柑の花には、元気にいきいきした気分があり、蓮の花や月見草の咲くのには、息さえひそめてうっとりした。ぴたっと身に貼りつく感動である。興奮である。子供ながら、それが鬼ごっこや縄とびのおもしろさとは、全くちがうたちのものだということがわかつていた。

ふじの花も印象ふかかった。いったいに蝶形の花ははなやかである。ましてそれが房になって咲けば、また格別の魅力がある。子供たちが見逃すわけがない。ただこの花は取るごとができにくかった。川べりの藪に這いかかっているのは危くてだめだし、野生のせいか花房も短い。庭のものは長い房で美しいが、勝手にとるわけにはいかない。そこで空家の軒とか、廃園の池とか の花の下を遊び場にする。私もそこへ行きたかった。けれども父親からきびしく禁止されていた。そんな場所の藤棚は、一見なん でもなく見えて、実はもう腐れがきていることが多く、ひよっとした弾みに一度につぶれるから危険だ、という。ことに水の上へさし出して作った棚は、植木屋でさえ用心するくらいで、子供は絶対に一人で行ってはいけない、といい渡されていた。

荒れてはいるが留守番も置いて、門をしめている園があった。藤を藤をと私がせがむので父はそこへ連れていってくれた。俗にひようたん池と呼ばれる中くびれの池があって、くびれの所に土橋がかかっていた。だがかなり大きい池だし、植込みが茂っていて、瓢箪というより二つの池というような趣きになっていた。藤棚は大きい池に大小二つ、小さい池に一つあってその小さい池の花がひときわ勝れていた。紫が濃く、花が大きく、房も長かった。棚はもう前のほうは崩れて、そこの部分の花は水にふれんば かりに、低く落ちこんで咲いていた。いまが盛りなのだが、すでに下り坂になっている盛りだったろうか。しきりに花が落ちた。ぽとぽとと音をたてて落ちるのである。落ちたところから丸い水の輪が、ゆらゆらとひろがったり、重なって消えたりする。明るい陽がさし入っていて、そんな軽い水紋のゆらぎさえ照り返して、棚の花は絶えず水あかりをうけて、その美しさはない。沢山な虻が酔って夢中なように飛び交う。羽根の音が高低なく一つになっていた。しばらく立っていると、花の匂いがむうっと流れてきた。誰もいなくて、陽と花と虻と水だけだった。虻の羽音と落花の音がきこえて、ほかに何の音もしなかった。ぼんやりというか、うっとりというか、父と並んで無言で佇んでいた。D<u>飽和というのがあの状態のことか、と後に思った</u>のだが、別にどうということがあったわけでもなく、ただ藤の花を見ていただけなのに、どうしてああも魅入られたようになったのか、ふしぎな気がする。（幸田文「藤」）

(1)「親が世話をやいた」（下線部 A）とはどういうことか、説明せよ。（3 点）

(2)「嫉妬の淋しさ」（下線部 B）とはどういうことか、説明せよ。（3 点）

(3)「こういう指示は私には大へんおもしろかつた」（下線部 C）とあるが、なぜおもしろかつたのか、説明せよ。（3 点）

(4)「飽和というのがあの状態のことか、と後に思つた」（下線部 D）とあるが、どう思つたのか、説明せよ。（5 点）

六、次の日本語文章を中国語に訳しなさい。(10 点×2＝20 点)

(1) 人間を抽象的自由人なり階級人なりと規定することは、それ自体は、段階的に必要な操作であるが、それが具体的な全き人間像との関連を絶たれて、あたかもそれだけで完全な人間であるかのように自己主張をやりだす性急さから、日本の近代文学のあらゆる流派とともにプロレタリア文学もまぬかれていなかった。

(2) 素朴な民族の心情が、権力支配に利用され、同化されていった悲惨な全過程をたどることなしに、それとの対決をよけて、今日において民族を語ることはできない。「日本ロマン派」はさかのぼれば啄木へ行き、さらに天心へも子規へも透谷へも行くのである。福沢諭吉だって例外でない。日本の近代文学史におけるナショナリズムの伝統は、隠微な形ではあるが、明らかに断続しながら存在しているのである。近代主義の支配によって認識を妨げられていただけである。

(竹内好「近代主義と民族の問題」)

七、次の中国語文章を日本語に訳しなさい。(計 30 点)

《2018 年白领生活状况调研报告》显示，职场白领普遍存在焦虑情绪，52.9%的白领有孤独感，66.5%的白领认为当前薪资“低于自己的预期，薪资匹配不上自己的能力”， 34.5%的白领表示工作以来从未加过薪，31%的白领表示虽然加过薪，但也只是 1%到 10%的“杯水车薪”。怀才不遇的心态普遍，这种情况也直接导致了白领们跳槽行为越来越活跃。

专家认为，科学的职业规划是白领改善就业质量，获得丰厚报酬和生活质感最有效的途径，摆脱迷茫，明确自我认识，制定符合自己的职业规划，并通过跳槽行为寻找机遇，是到达成功的最优逻辑。

八、次の記述を参考に、「忖度」はなぜ流行語になったのかを題目に作文（600－800 字）を書きなさい。(計 30 点)。

「２０１７ユーキャン新語・流行語大賞」の年間大賞には、「インスタ映え」と、森友・加計学園問題で盛んに使われた「忖度（そんたく）」が選ばれた。「忖度」は造語・新語ではなく、もともと日本語に存在していた。中華圏で「人の考えを推し量り自分が不利益を被らないようにする保身的行為」といった意味で深く根付いているという。日本では特に、自分より上位の者の心情・立場などを考慮しその者に良いように振る舞うといったことが慣例・文化としてとらえられる傾向にある。現代中国語の口語ではほとんど使われない。